

達を迫られている。これこそ切実な現実の問題ですからね。
て、話は変わるが現在、上海に見玉機関というのが存在するのを知っていますか？」

「それは、名前だけは聞いていますよ。なんでも、海軍から委任されて、主として中国側の物資を売買している特務的な機関だということじゃないですか」と、三宅が言った。

佐伯には初めて聞く名であった。

「その責任者は兎玉齋士夫というまだ三十代の若い右翼青年だと聞いていますかね。最近特に活動が活発になって来ているらしい。それと万和洋行ですね」

「万和？　なんですか、その万和洋行というのは？」と、佐伯も口を入れた。

「これは海軍で直接やっている売買機関ですよ。南京海軍武官府内に事務所があるとか、田中さんに聞いていますがね。兎に角、内地からの物資補給が望めないで、少くとも中国では現地で、食糧はじめあらゆる物資を調達する必要に迫られているのですよ」

「それからですね。いよいよ我が大陸新報社にも赤紙が来るようになりますよ。つまり物資どころか人的資源、兵隊にも不足をきたして来たのですな。先日一人召集を受けましたが、続いて来ることは確実で、正直拙者も独身——ビクビクしている始末ですよ」

「その点は重鉄としても同様です。特にも我々事務職はね。それと近い将来、全職員が軍属に復帰するという噂がもっぱらです。無論軍属にも赤紙は遠慮無く来るらしいですがね」

——話題は急激に逼迫して来た状況と、不足してゆく生活物資に集中して尽きる事が無く、初冬の夜はすきて行つた。

「ゆうべ夜中によ。今朝といってもいいかしら——十二時を過ぎていたから」
「それでは間違いない今日だ。十一月二十九日だよ。名前も考えてある」

「なんてつけたの？」

「春枝。春の枝だ——伸びるようになる。ぼくの母が『はる』、祖母が『はるの』だ。母は大火後の流行病で急死したが、祖母は七十八才で長命だった」

「じゃ、いい名前だわ。——春枝ちゃんね」と言って、小さな子の白い顔に口づけした。

赤ん坊はちゅと、顔をしかめた。

「何グラムあった？」

「三キロちょっと——八百五十匁。丁度標準だって——」

「そうか、よろしい——では会社に行ってくる。今にまた来て見よう」

「わたし、こないいい子のお母さんになれて、本当にうれしいわ」

「うん、しかしあとが大事だ。できるだけ長く入院していることだ。外気は寒いがこは暖かいし、看護婦も揃っている。人手の無いホテルよりよっぽどましだ。おれは外食で結構やってゆける。朝飯はまだかい？」

「それが病院は早いよ。七時になるともう朝ご飯なの——もう済んだわ」

「そうか——そんなに早い朝飯は暫く喰ったことがないな。いや、と、そこでおれも朝めしに行ってくる。じゃあとまたな——」と言つて、彼は病室を出た。

翌朝、ホテルの部屋で独り目覚めた佐伯は、身支度もそこそこに会社に出かけた。今日も暗く曇った空から風花が舞って、寒い朝である。彼は今朝から冬支度、オーバーを着て出た。

病院に着くと彼は早速病室に入り、妻のベッドに寄り添った。——驚いたことに、彼女の傍の小さなベッドには、玉のような赤ん坊が並んで眠っていた。赤ん坊というには色白で、頬のあたりと、小さな形の良い唇だけが紅をさしたように赤みがあり、眼は閉じられて細い眉と平行して一直線に並んで長い睫毛が伏せられていた。人形のように余りに整った顔容に、彼は一瞬息を飲んだ。端正な仏菩薩の顔でもあり、ふくよかなお地蔵さんのやさしい面差しでもあった。△男の子かな△と、思った彼は手を延ばして、形よく高く尖った鼻に手をかざした。たしかに微かながら呼吸をしている。彼ははじめて顔をほころばした。赤ん坊の上には貂の毛皮が掛けられてあった。傍の花江が目を覚まして頬笑んだ。

「あなた来ていらしたの。可愛い子でしよう。残念なことに女の子だったのよ。でも看護婦さん達言ってたわ。△こんな可愛い赤ちゃん見たことがない△。わたし嬉しか。たわ。△トンビが鷹の子を産んだみたい△がして。ただ男の子でなくて残念でしよう」

「うん、可愛い子だ。見た途端に男の子かと思えたが、女の子だったのか——だが女の子、大いに結構じゃないか！　絶世の美人になるぞ！」

妻は笑った。

「お父さんに喜んで貰ってわたし嬉しいわ」

「いつ産まれた？」

職員食堂は今が最中で、ホーイ達は元より、裏の賄い方までが転手古舞いであった。

食事を済まして、彼は生計所の二階の事務所に入った。出勤簿を庶務に届けながら、

「高杉さん、今日からぼくもチナ親ですよ」と言って、笑った。

高杉は、

「なんだって！　そんでは佐伯さんに子供さんが出来た。つのけ？」

「然り——今朝がたね」

高杉は笑った。

「親の責任重いわ。今後ますます自重を要す———どうだござへな」

「名前は春枝——つまり春の枝」

「もう名前もつけたのがや！　然しさに、領事館と民団に届けねどいげねな」

「それはまッ急がなくともね、二週間の期間があるのだから——」
「とにかく、おめでとう」と、庶務の一同が言うのに、笑って一礼を返して席に戻った。

タバコに火を点けて、ゆっくりと一服吸ってから店開きをした。資材部から回って来た書類に眼を通して、支払命令書を書いて、高杉の処に持って行った。

高杉は、

「佐伯さんがごさ支払命令を届けるのも、もう何日もないですな」と、笑って言った。

「そうですね。今度は逆に、金を払うほうの側に回りますね」

「もう佐伯さんの後任は決ま。たようですよ。本社の厚生課から来る参事補だとか——然しご老体のようですから、まだまだ佐伯さ

に出ると通りを突。切り、中国人街に入ると間もなく大橋路の広い闊静な通りに出た。そこからすぐ近い祥華酒行の前まで来ると、阿部が一人で、奥の卓子に席を占めて老酒を飲んでいる姿が見えた。

「阿部さん、しばらくでした」と、田中が気さくに声をかけた。

阿部はニヤリと笑って、

「これはこれは、お揃いで……」

「阿部さんもお元気で何よりでした。ホテルで解散以来、もう半月に余りますね」と、佐伯は声をかけて、その隣に席を取った。

田中は通りを背にして席を占めた。大体日本人の習慣で奥の方を上座とするが、それに拘泥する田中、阿部、佐伯の仲でもなければ、田中、阿部自体そういう事には一切無頓着であった。

「日、一日と初夏の風情が濃くなって来ますね。田中さんは南京からいつ？」と、阿部。

「四、五日になります。今日は佐伯さんに宿の方に迎えに来られましてね。久しぶりに皆さんにお会いできてすっかり愉快です」

酒行の老板が一斤入りの酒壺を二本持ってきて、落花生の小皿と一緒に田中と佐伯の前に置いて去った。二人は各自に老酒を注いで、酒杯に口をつけた。佐伯は笑いながら、

「田中さん、この老酒、何とも感じませんか」

「感じて、何をですか？」

「飲み合がよいとか、悪いとかですよ」と、阿部が笑いながら言った。

「そりゃ上海の老酒は、南京と比べると、ずっというですな」と、田中が答えた。

「たったそれだけです。——この老酒は佐伯氏が選んで買って店に

置いてあるのですよ」

「そうですね、おしは又何気なしに、ただ、良い酒だ、とは思って飲んでいましたよ」

阿部は笑い出した。

「田中さんにそう思ってもらえば、佐伯さんも定めし本望というものでしょうが」

「その通りです」と言って、佐伯も笑った。

「所で、阿部さんにいつか、『児玉機関』と『万和洋行』についてお話を聞きましたね」

「ああ、そんな事があつたね。『児玉機関』は海軍の将校連中の支援を後盾とした右翼の、児玉馨士夫が主宰する軍の物資売買機関で、上海が本拠です。『万和』の方は或いは田中さんの方が精しくござんじかも知れないねえ」

田中は決して人に酒を進めることをしない——一人手酌で老酒を飲んでいたが、

「万和洋行ですか。あれはわしが大使館における関係で、海軍武官府の室田さんとはごく懇意にしていますが、つまり『万和』は武官府にある、というよりも海軍武官府新街口弁事処そのものが万和洋行の実体で、秘密機関です。室長は室田という現役の海軍中佐ですがね、どうかしましたか？」

「それは都合がよかったですよ。実はそこで田中さんに一つお願いの筋があるのですが——というのは、その万和洋行にばくの人社をこっそり雇いたいということなのです」

「万和洋行に入社？——それで華鉄の方はどうされる心算ですか？」

「万和への入社が確定すれば、勿論華鉄は辞職します」

「華鉄から万和に転替えをする、という寸法かね、然しそれは一体、どういふ心境の変化かね？」と、阿部が言った。

「華鉄の勤務が今別にどうのこうのという事ではないのですよ。華鉄におれば無事太平でもあり生活もまずまず安泰でしょう。ただ五月初め、ナチ・ドイツの全面降伏以来、戦況が更に日本に不利になり、米軍の大陸上陸作戦も殆んど現実に射程距離に入ったようだし、一方又、日本本土への空襲の激化から考えて、これは米軍の今までのやり口から見ても、この方面にも上陸作戦の可能性があることも十分に考えられますね。ビルマではラングーンが陥落し、南九州、岩国、徳山方面にも数百のB29の大編隊の空襲があり、数日前の十四日には四百機の編隊が名古屋に空襲をかけた。これは明らかに米軍が日本本土の何れの地点かに上陸を企図している証左です」

而も海岸線の長い日本列島は攻めるに易く、守るに難い。上陸地点を何処に據ぶか、或いは同時に数カ所にするかは、欧州戦局が終結した米軍にとつては思いのままです。まず東京攻略を目指す房総海岸——これは大体確実でしょう。次いで東海方面。またこれも可能性のあるのは神籠を基地とする飛び石作戦で、確実に南西諸島を一つ一つ殲滅させた後、南九州から北九州を狙ってくる。とくに神籠が完全に敵の手に渡れば、中国大陸といわず日本本土といわず極東の戦局は決定的となり、抗戦を続ける限り日本民族は滅亡の危機にさらされる、と思うのがね。今は華中の天地だけに安閑としていられない。つまりばくの狙いは、軍の直屬機関であり、しかも秘密機関として地下潜行的な特質を持つ万和洋行の情報、工作組織の中にもぐって、自由自在な活動をやつて見たいと思うのですよ」

阿部は、聞いて笑いだした。

「家族を内地に帰して一人になって、またその冒険癖が頭をもたげ出した、という訳か。大分、万和を持ち上げたが然し、絶えず敵地に入つて敵側と接触する立場にある万和の社員には、並み並みでない危険が伏在していることも承知かね？」

「中国大陸全体が、華中、華北、華南を問わず、やがては満洲国も、そして日本本土も戦火の中に巻きこまれようとしている時、上海だけの天地に踞踏していることは却つてどうかと思ふね。いやそれよりも、目先にばかりとらわれて定見の無い軍の命令に盲従して、それで安泰だと思つている国策会社等にいることが、どうにも我慢がならないでせうね」

「それは決してその考え方が良くないと言ふのでは無い。がまた早まりすぎた考えもどうかと思ふ。それはだね、限りなく自由を求めて、付帯する危険を顧みない性格は人間としても甚だ魅力的なものだが、その上あんなの場合、天性甚だ自由自在で行動的だとは言える。然しここで考えなければならぬのは、万和洋行とても海軍武官府が表である限り、れっきとした軍なのだからね」と、阿部は言つて、佐伯の酒杯を満たし、佐伯も阿部と田中の酒杯に酒を満たした。田中は、

「それではですね、今度南京に戻ったら、一応、室田さんとよく相談してみましよう。勿論わしからは推薦しておきますがね」

「よろしく頼みます」

「然しだれ、ここで問題は佐伯さんのような軍隊さらい、というよりも反軍的傾向の人物がだね。軍機関に入つて、勤まるものかどうかね」と言つて、阿部はまた笑った。

「いや阿部さん、それはちと違うと思うね。ばくの反軍傾向は、戦